第２回徳島県農工商教育活性化・魅力化協議会　会議録

１　日　時　　令和元年１２月５日（木）　１３：３０～１５：３０

２　場　所　　県庁９階　教育委員室

３　出席者

【委　員】　１３名中１３名出席

市岡 沙織委員，岩浅 良治委員，岡 富士子委員，勝瀬 典雄委員，
儀宝 修委員，小原 史明委員，多代 かえで委員，寺内カツコ委員，
西 裕治委員，人見 崇之委員，伏谷 茂委員，森本 泰造委員，
横井川 久己男委員

【事務局】　教育創生課長　ほか７名

４　会議次第

１　開　会

２　議　題

（１）徳島県農工商教育活性化・魅力化方針（素案）について

（２）その他

３　閉　会

資料１　徳島県農工商教育活性化・魅力化方針（素案）

資料２　第１回徳島県農工商教育活性化・魅力化協議会の主な御意見について

５　会議概要

議題①　徳島県農工商教育活性化・魅力化方針（素案）について

事務局　（資料１に基づき，第１章から第４章まで説明）

委員　大学の方でも，農工商が連携した教育や，農林水産業の持続可能な発展を担える人材の育成を目指しています。徳島大学生物資源産業学部では，推薦入学に地域枠として県立高校の専門学科・総合学科の生徒４名という入学枠を設けています。ただし，高等学校での教育と大学での教育には少し隔たりがあり，それを何とか解消する必要があります。高大接続あるいは高大連携といった形で，専門高校を卒業された方もそれまで学んできたことを十分に生かして，さらに専門的なことを学んでいただきたいと考えています。そういった高大が連携した大学入学後の教育あるいは入学前の教育の在り方について，現在，部内で検討を進めているところであります。

第３章で新たな課題として指摘しているように，これからはＡＩやロボットを活用した教育を行っていく必要もありますが，そのためには大学入学前から十分に基礎知識を身につけさせる教育をする必要があると感じており，大きな問題です。このように，ここで指摘している新たな課題は，一朝一夕には解決しない問題ではありますが，そこに１次産業の魅力を伝えていって，将来的に自分の一生の仕事としてやっていけるという期待と希望を持てるような形にしていく必要があります。

委員　徳島にはいくつかの大学がありますが，県内の高校からは県外にかなり進学しているのではないかと思います。人口は減少するが大学進学率は上がり，高等教育の無償化も始まろうとしている中で，県外に進学をした人たちを呼び戻す仕掛けというのは実はあまりやられていません。徳島県の場合，ほとんどの高校は送り出し機関となっています。県外の私立大学などは学生獲得に走っていますが，学生を各地域に戻す仕組みはほとんどありません。県内の大学に進学された方は徳島のことが情報として入りますが，県外に進学した学生さんはぷつりと切れてしまうのではないかと思います。そこで，生徒を送り出す教育とともに，地元へ回帰させる教育といった考え方も盛り込んではどうかと思います。

委員　人口がこれだけ減って，今まで減るという言葉を聞くことはありましたが，増やすという考え方は聞こえてきませんでした。おっしゃるとおり，せっかく子育てしているのだから，徳島の子どもは徳島で就職させる方策を考えていただきたいと思います。就職や進学で県外に出ると，交流関係が広がるのは確かだと思いますが，一端出たら地方には戻ってこない傾向があります。学校の先生には出来るだけ徳島は徳島でということを子どもに伝えていただけたら，本当に助かります。

委員　産業界としても，それが一番かなと思います。地域によっては，人口の減少がより顕著にみられるところがもっとあります。それも高校を出てから戻ってこなくなる状況があります。特に専門学科で学んだ生徒は実戦力となるので，農業系，商業系，水産系等の分野に就職していく状況があり，それに加えて，大学進学という選択肢が入ってくるのであれば，戻す仕組

みというものも教育のなかに組み込むべきではないかと感じています。

委員　確かにそのとおりだと思います。徳島県で育った人には将来的に地域を輝かせるような人材として徳島県で働いて欲しいです。徳島県で働かないにしても，徳島に何らかの形で貢献する人材の育成が非常に重要です。

一端出ていった人を呼び戻すという方策ですが，大学の場合には，大学を出てから県内に就職すれば奨学金返還を支援する仕組みなどがあります。資料を見ますと，県内の高校生の現状を示す５ページの県内就職者数の割合が６割から８割弱ぐらいであり，この数字というのが低いように思います。高校の場合も一端出て行ったとしても戻ってくるような仕組みがやはり必要ではないかと思います。

委員　高校にしろ大学にしろ，最終的にはどこかで働いて社会に労働という形で貢献するというのが最終目標であると思います。今回の議題は，高校でどういった人材育成をするのかだと思いますが，就職というなかで，自分がどういう仕事をしたいのか，どういうビジョンを描いているのかという自己分析ができている方は，多少ぶれがあっても自分の方向性を見いだしていけると思います。自分のビジョンが描けないまま，例えば，自分がこういう高校の学科または大学の学部を出たからその業界というように，簡単に選んだ方は，少し小さい問題にぶち当たったときに，もっといい会社があるのではと考える傾向が強いのではないかと思っています。

特に大学と高校の違いは，大学に比べると高校は先生との距離感がとても近く，実習などを通してビジョンを描くための具体的な知識というサポートを受けられるというのが，専門高校のいいところではないかと前回理解しました。専門高校では，将来どういうスキルをもって，どういう人生を描いていきたいのかというビジョンを描きやすい実習ができるととても生きてくると思います。最近人材不足で就職先が多くあり，県外大手からも推薦が多く来るなど就職がいいと思います。自己分析をされたうえで大手に行くのは素晴らしいことですが，そこで初任給だったり，企業のブランドだったりというので安易に県外に行っている方もゼロではないというイメージがあります。自己分析ができていれば，最初から徳島県の中小企業で技術をもっているところが，選択肢としてあがってきたりするのかなと思います。

委員　そうですね。せっかく地元で事業をやっておられる方であれば，地元の方を優先的に採用したいですよね。

高校という段階を終わると，同窓会などがあるかもしれないが，地元とつながりが切れてしまっているという環境があります。先般，全国から学生が集まる早稲田大学において，学生が就職する前に，高校の先生と一緒に大学へ行き，地元への就職を勧める説明会を個別でやった町がありました。実際にやってみると非常に有効でした。その町の出身の学生は集まってくるし，地元に対する思いを聞くこともできて，とてもよかったということです。これは生徒を送り出していく学校にとっても，受け入れていく産業界にとっても重要なことだと思います。特に専門高校の皆さん方も進学率が高くなっているということですので。ただし，先生方にそれをやってくれというのは高校教育の役割がとても広がるので，無理な話なのかもわかりません。

委員　今日も別の会議で話していたのですが，大阪，奈良など県外で就職された方の同窓会をすると，徳島市の人口ぐらいに相当する，およそ２０万人が集まってくるといいます。それぐらいの人が徳島でいてくれたら助かりますよね。県外の方とも交流していかないといけないとは思いますが，やはり出来るだけ徳島の企業を第一に考えていただいて，学校の先生にも話を進めてくれると非常に嬉しいです。

委員　大学へ行くと，大学の教員と学生の関係はそんなに強くはなくて，高校までが先生との密着度が非常に強いですね。

委員　城西高校神山校では今年から「地域との協働による高校教育改革推進事業」をやっており，神山町とまさに手を組みながら生徒を育てる取組を進めています。そこで，神山町がいろいろな活動の報告会をするときに，地元出身の大学生がインターンシップなどで来て，高校生とともに発表する中で，「大学へ行ったときは地元のことを分かっていなかったが，こうやって来ると地元のことがよく分かって，やはり地元の魅力を改めて感じる」などという報告もあったりします。結局，学校だけでなくて，地域という部分が加わると，大学や企業などとのつながりができるということを非常に感じます。それは，現在の学習指導要領において社会に開かれた教育課程といわれているとおりで，そういう観点から，具体的な策も入れていく必要があるのではないかと思いました。

委員　私が以前勤めていた美馬商業高校では，特産のみまからの生産や，ネット販売，地域おこしの映画作りなど，いろいろな地域貢献活動をして，地域づくり総務大臣表彰を頂戴したりしました。しかし，そういった活動の中心となった生徒ほど，なぜか進学や就職で県外へ出て行きます。ただ，そういう生徒たちのなかには，地域に対する思いなどができているので，戻ってきてＮＰＯを立ち上げて活動をするものも出てきています。出来ればそういった生徒たちをサポートするシステムが県内にあれば，生徒たちのチャンスも生まれ，人数も増えてくるのではないかと思います。

委員　本当は産業界がというお話もありますね。

委員　何か徳島にいていいなという魅力をつくっていくというのが一番です。魅力がないから，先生も外へ出した方がいいだろう，この子は成長するのではないかというような雰囲気があるのだと思います。これからは何か魅力のあるシステムを考える必要があると思います。

委員　大学科の工業科がある学校は，徳島科学技術高校，つるぎ高校，阿南光高校の３校になります。その他工業の勉強をしている総合学科は鳴門渦潮高校であり，あわせて４校です。特に最初の３校におきましては，地元志向が強く，たくさんの生徒が県内で就職しており，平均で６から７倍の求人倍率となっています。工業では地域性があり，つるぎ高校では，県西部で県境に近いことから，地元企業に就職したいと考えたときに企業がそれほどありません。香川県や愛媛県の西条市まで範囲を広げると，自宅から高速道路を使えば通えます。徳島市内あるいは阿南市，鳴門市となれば逆に遠くなるということもあり，四国内での就職が７５％ぐらいで，そのう

ちの半分が県内で，あとは香川県や愛媛県に就職するという生徒が多くいました。阿南光高校におきましては，南部の学校ですので地域性が非常に強いです。地元で就職させたいという親御さんの気持ちとか，高校を卒業してすぐに就職するなら工業科のある高校へ進学した方がいいということで，そのような目的を持って入学している生徒が多くいます。

また，キャリア教育ということで特に阿南工業の時代から取り組んでいることといえば，徳島県中小企業家同友会との連携による社長塾です。徳島県の中小企業の社長様を講師として招いて，全校生徒を対象とした講演会をしています。その後，各学科の代表生徒と社長様との懇談会で，仕事の面白さとか夢といったことを直接聞ける機会をつくっています。その結果，会社の規模にかかわらず，かなり地元の定着率があがっており，そのような面でも中小企業の社長様には大変お世話になっております。ただし，自動車関係や重工関係，造船関係の業種になると関西圏，愛知県のあたりの企業になってきます。

委員　そういった地域を活性化できるような人材育成というのは難しいと思います。また，それを支える専門高校への入学生というのは，先ほどの進学希望率では横ばいであり，中学生の意識として，専門高校よりも普通科という意識が強いのでないかと思います。しかしながら，将来的に地域貢献と考えたときには，普通科に行こうが専門高校に行こうが変わりがないように思いますが，そのあたり違いはあるのでしょうか。

委員　中学校の段階では，自分のビジョンが見えていない子が多くいます。保護者と相談した結果，高校３年間で自分の方向性を決めたいということで普通科に進学するとか，ビジョンを持っている子は理数科に行って将来こういうふうな目的を持ってやっていくなどという場合があります。なかなか１５歳の子どもたちにどうするかというのを求めるのは非常に厳しいかと思います。

委員　おっしゃられたように，事業主もそういうような考え方をもっていった方がいいですね。自分のところに来てくれと宣伝もしないで，先生が全然送ってくれないと言うのではいけないと思います。保護者と先生と子どもの３者が，徳島を魅力的に考えていただけているかということが大事です。学校の先生だけにお願いしても，どこの魅力をしゃべったらいいの，どんな魅力があるのか，私たちは何をしたらいいのかというところが学生と一緒で分からないと思います。５，６年前までは何もしなくてもどうにかなっていましたが，これからは保護者と先生が社長と連携していかないといけないと思います。先生だけに頼るというのは無理かと考え直しています。

委員　学校単体あるいは教育委員会単体でできることには限界があると思います。神山町の話が出ましたが，一端出た人が帰ってくるとか地域の魅力づくりみたいなものは，かなり行政が担う部分であったり，関連企業との連携であったりという部分が非常に大きいと思います。そこはプロのちからをしっかり借りて，例えば地方創生の事業を活用するなどして，そこに教育の部分がどういう力を発揮できるかを考えることが，一番自然で効果的なやり方なのかなという気がいたします。

農業高校のなかでいかにどれだけ魅力的な学びがあって，そこで関心度

が高まって，一端，進学や就職で県外へ行ったとしても，血縁関係は徳島にあるというパターンが多いと思いますので，そこで全然同じ尺度で他県と比較するということはないと思います。高校で学んだあの農業，あのきっかけを与えてくれた農業，例えば近所の農家や地域との関連などを思い出して，自然と帰ってきたいなと思う部分はあると思います。だから，農業分野で特に田園回帰という流れが非常に大きくなって１０年，１５年続いていますが，都会の方から田舎を見る目は，非常に魅力的なものがあります。そういったことを考えたときに，どれだけ高校のあいだに関心度を高めるか，地元の良さを確認させるか，地域の良さをしっかりと植え付けるか，そこに起因してくるのかなという気がいたします。

事務局　（資料１に基づき，第５章，第６章の説明）

委員　１７ページの方策２に，「先端技術に触れる教育の推進」とあります。よく大学訪問をしていただくのですが，なかなか十分な時間がとれずに，大学の紹介や学部の説明で少し見学してもらって終わるという形になっております。その先端技術に触れるという実際のところが，これまでのところは不十分ではないかなと感じております。ですから，先端技術に触れるというところは，もう少し高大連携をして，徳島大学にも最新のものがございますので，そういったものに触れられるようにしていかないといけないと感じました。企業の場合にはあまり自社の最先端を見られては困るのかなと思いますが。

委員　具体的でとても分かりやすいですし，素晴らしい内容にまとまっていると思います。特に人物像ですが，素晴らしいと思いますし，こんな方がいらっしゃったら，是非来ていただきたいです。生徒さんに対して企業側から就職を見据えての要望というのが中心になっていますが，逆に学生さんから見ても就職は非常に不安なことでもあるし，人生を決める大きな選択だと思います。学校側から見たときに，例えば，どこに就職するかを決めるにあたって，高校生はどういった情報を大事にして選択されているのか，学校教育のなかで産業界の方から伝えなければいけない内容とはどういものか素朴に感じたのですが，いかがな状況でしょうか。

委員　高校生すべてというわけではないですが，自分の思い描いている車関係の企業といっても，実際の仕事は関連会社から集まってきた部品やパーツを組み立てるだけです。本当は自分たちが機械加工で，旋盤や溶接などいろいろ勉強してきた機械技術を生かしたいと大手の企業に行ったときに，実際は組み立てだけで，ほとんど機械がやってくれるという操業的なところが強く，自分の技術が実際に生かせなかったという例もあります。
　２年生でインターンシップに２日程度行かせます。長期インターンシップというのもありますが，どんな仕事かイメージをつかめる程度です。いざ自分がそこへ勤めるとなると，思い描いていたものと現実とのギャップが出てきます。そういったミスマッチがないように，３年生で定職に就くかどうかというぎりぎりのところで，応募前見学をお願いして，思っていたものと違うという場合は辞める場合もあります。そのように，最後の詰めの段階で，そこへ行って本当に思い通りの仕事ができるのかというところを確認させるようにしています。自分が思っていることと実際にする仕

事のギャップを縮めてやるというのが大事なのかなと思います。

委員　会社には技術だけでなく社風があり，生徒さんにも個性があることから，相性という点で結構マッチングがお見合いのようなもので重要だと思います。私ども製造業といっても，かなり専門スキルが必要なところもあれば，広い視野と柔軟性が必要な会社もあります。大学となれば会社見学でかなり深くまで入っていくと思いますが，高校生の方には企業からもあまり説明をする機会がなかったりします。就職前訪問という形で情報がうまく行き交うといいのではないかと私も感じます。

委員　おっしゃる通りで，会社に合う合わないがあるから，県内同士で近いから会社見学というのを増やしていくといいと思います。

委員　私どもは御菓子をつくるメーカーです。中身は御菓子を機械でつくっていますので，機械メンテナンスの工務という部署があります。そこでは，御菓子を扱うより機械を扱って安定稼働するように修理もするのですが，手作業でケーキを焼いていると思われている方が多いと思います。これはひとつの例ですが，そういう情報が行き交えばいいなという気がします。

委員　先般，実務家教員という言葉を使わせていただきました。企業の中で自社のことについて実務的に組み立ててきた方たちは，社内教育もしているし，実際，そういった担当というのもあります。企業の代表者が来て就職のための説明をするのでなく，そうした立場の方を教員のように使っていただくと，かなり立場的に違ってくるのではないかなと思い，実務家教員という言葉を使わせてもらいました。

事務局　大学の方ではかなり広く入ってきているようですが，高校の教育に教諭として入ってもらうというのは難しい点もございます。専門高校であれば，技術的な専門的指導はもちろんですが，それ以外に生徒指導や部活動の指導，校務分掌等もしていただかないと学校としては成り立たないと考えております。ただ，そうした技術的な指導は非常に必要ではないかということで，14ページの方向性の２でまとめさせていただいています。外部の専門家の方にも来ていただくのは，一時的には可能と考えますが，常駐するというのはなかなか難しいです。

委員　外部講師を招聘できる形，そこの活用の方法というふうにとらえていただくのがいいかもしれません。

委員　現在，県教育委員会では社会人講師の招聘事業という制度があります。例えば，機械の旋盤で技能がかなり高い方で企業を経験されてご退職された方などをお呼びして，工業高校の機械科で旋盤の授業をしていただいています。また，それ以外の学科においても，専門性の高い人に外部講師としてご指導いただいておりますが，なかなかそういう方がいないということもあります。それをいかに人材を発掘して学校の方へ加配するのか，これがさらに必要になってくるのではないかと思います。

委員　今までの技能教育とか専門教育をされている方たちは仕組みがあります

が，無償で公募してもたぶん来てくださると思います。学校で教えませんか，ただ無償ですよという形で。これまで社会貢献という形で呼びかけたことはないと思います。社会貢献という意味合いで，自分が経験してきたことを若い人たちに教えるのはどうかということで，何人かに声をかけてみました。そうすると，職能の技能士ではないけれど，経験を若い人に教える立ち位置なんてあるのかと逆に聞かれます。そういう人たちは社会貢献をしたいと思っているのでお金はいらないです。当然ながら，基準というものが必要ですが，その人に適性があれば活用すべきかなと思います。

委員　高校では非常勤講師の手当というのは予算化されているわけですか。

委員　非常勤講師として社会人講師の予算化をしていますが，予算的にはそんなに多くはないです。すべての学校の希望通り叶うかといったらそうではありませんが，できるだけ時間の調整をしながら配置している状況です。

委員　６次産業化教育ということで農業の生産物を加工して食品を作るため，アグリビジネス科などに新しい設備を導入してもらっています。しかしながら，農業の教員は食品加工のプロパーではありません。教員自身の要望としては，自分自身がある一定期間専門学校のようなところで学ぶとか，あるいは技術の高い方に来てもらって実際に教えてもらえないかという思いがあります。そういう場合に学校を支えてもらう指導者が入ってきてくれる仕組みがあったら，６次産業化教育の実際のエンジンとして進めていくことができます。委員さんのなかには，以前農業大学校の文化祭で高校生が自分たちでつくった製品のプレゼンをした際に講評してくださった方がいます。そういう外部の専門家の方と連携して学校教育の質を高めていくといった仕組みをこの方針のなかに盛り込み，その成果を検証しつつ，農工商教育の活性化・魅力化を進めていければと思います。

委員　まさしく農工商の枠を超えた６次産業化教育を進めていきたいということだと思います。その体制が現状では十分でないということですね。

委員　学校現場では，できるだけ多くの分野で外部の専門家と連携したいという思いがありますが，県としては予算や講師を充てる時間数の枠というのがあるから，それには限界があります。城西高校神山校では，神山つなぐ公社の方に神山創造学の授業に来てもらっていますが，報酬を全ては払いきれず，ボランティア的に関わってくれたりということが多くあります。

委員　教育では，費用はいらない，予算なしという仕組みはあり得ると思っています。役所の論理になると，どうしても予算で始まり予算で終わってしまいます。地域で子どもたちとどう関わっていくのかという見方がほとんど出来ていないので，関係するような仕組み，先生方とコミュニケーションがとれ，バックアップできる仕組みが教育のなかにはあっていいと私自身思っています。

委員　農業大学校とは定期的にコミュニケーションをとって，本当にいい商品であれば，イベントの時にその商品を自社の商品として発売させていただいたりしたこともあります。時間的なマッチングなどはあるといいながら，

企業が費用をいただかないとという感覚はあまりもっていない気はします。徳島に就職していただきたかったら，徳島の企業もアピールしないといけないというのはその通りだと思いました。口を開いて待っていたら来るわけではないなかで，自社の取組のお話をすることで学生さんに自社のことを知ってもらえればと思います。仮に県外のスーパーなどで売るとなったら，商業科の方などであれば販売の実践もできるし，県外の学生さんへの企業アピールなどになるのかなと思います。仕組みづくりが難しいのは重々承知していますが，費用がなくても企業は十分参加するようには思います。

委員　今思うに学校の先生と会社の社長さんとのミーティングが全然たりなかったと思います。もっとたくさん人がいたときは，「先生，今度４，５人お願いね」と言えば入社してくれていた時期もありました。でも今，日本全体が人口減になってきており，どう徳島に残すかといったら，徳島にいる者同士，会社見学に来てもらったり，どういうところがいいのかを学生にも把握してもらう必要があります。お互いにもっと親密になって，この子はどこへ行くのがいいか決めてやるくらいが一番いいと思います。

うちの会社の個人的な話ですが，トヨタに就職したけどオートメーション化されており，ずっと一日中眺めているだけで，面白みがないからＵターンという子が入ってきてくれています。やはり中小企業の良さもあるので，今の現状では企業側の努力が足りなかったと思います。何か会をつくって，どうしていったらいいのかを考えてみたいなと思います。

委員　先程も申しましたように，アグリビジネス科での教育を農業の教員免許を持っている教員が誰でも指導できるのかというと難しい現状があります。そこで，方向性の２にあります最新鋭の施設設備等の共同利用や外部専門家の派遣，また教職員が知識・技術の進展に対応して専門性を高め，新しい指導方法を身に付けられるように，という方向性でやっていくことはいいと思います。先生だけでなくて外部の力も生かすなど，これからの時代，学校の中だけでやりなさいというのはない方向です。これまでリードしてきた産業教育の方々が連携して，農工商水産のそういう教育が，これからの学校教育の在り方も変えていく先頭に立つんだ，というふうにしていけばいいのではないでしょうか。

委員　実際，教員が専門性を身に付けるというのは非常に大事であると思います。以前には，長期社会体験研修として，農業では三好高校の教諭が酒造会社で１年間お酒の作り方を学んで，その技術を持ち帰って三好校で実践しています。工業では，四国電力さんや四国化工機さんなどに行って，専門的な知識・技術を身に付けた教員が現場に帰ってきているということをやっています。しかし，外部へ研修に出せる先生がなかなかいないような状況，つまり，それよりも目の前の生徒を指導する必要があり，学校現場に余裕がなくなってきている状況です。そのため，毎年のようにはそういった研修が行われていません。何年かに１回希望がある場合には派遣しており，消費者情報センターなどに行っておりますので，こうした制度をどんどん活用していただくということと，企業さんの方にもそういう希望が教員から出ましたら引き受けていただきたいなという希望がございます。

委員　そういう場合，研修の間は非常勤を雇われるのですか。

委員　代替教員を配置しております。

委員　池田だったか，どこか廃校になった学校で，そこで定年になった方が，かぼちゃなどのチップを作って販売していますね。かぼちゃから豆やニンニク，ゴーヤまで，すべての野菜をチップにしたり粉にしたり，販売もやっていて，販売するということは衛生管理もできています。そういう人と連携させてもいいかと思います。

委員　どこの学校も人，予算ともかなりきゅうきゅうなものがあると思います。おっしゃられているように，自分の学校のなかの教員だけで，ますます多様化している６次産業化について，幅広く奥深いところまで全部教えて完璧にするというのは不可能であると思います。生徒さんからしても，言い方が悪いですが，中途半端な６次産業化を学ぶよりは本当のプロから回数少なくても本物の技術であったり，やり方であったりを教わる方が本当にその良さが分かるし，その方向へ進もうかなという意識も働くのではないでしょうか。
企業さんのいろいろなお話で，企業ＰＲになるのであれば無償でも行きますという御意見がありました。もし賛同等が得られるのであれば，学校，教育委員会であったり，企業の組織であったり，関連する団体が，例えば連携協定みたいなものをまいて，このタイミングでこういう企業の人に行ってもらいますみたいなものが，スケジュール的に段取りできるようなところまで持っていければ，学校側も楽ですし，肝心の生徒側もとてもプラスになると思います。教育だけでなくて，自分の範囲の中だけで何かを完結するというのは不可能な世界だと思います。ＪＡグループにも，営農指導員という現場で農家の指導をするある程度技術をもった人間がいますが，そのなかだけでも技術に限界があります。例えば，今年から徳島県立農林水産総合技術支援センターと連携して，お互いの研修を相乗りできるような仕組みをつくりました。相手さんの技術も活用するという考え方も盛り込めれば，とてもいいものになると思います。

委員　ある意味で教壇に立つわけで，基礎教育だけは当然として受けていただくという形が正式にオーガナイズされれば，全然問題ないと私は思います。

委員　協定とおっしゃっていましたが，確かに一企業，一企業と一学校ではとても大変ですが，おそらく工業でも農業でも食品などでも協会のようなものがあると思います。先ほど徳島県中小企業家同友会という名前も出ましたが，食品の方では食品工業協会というのがあって，そこに菓子組合や味噌組合などいろいろなものが入っています。例えば，そういった組合の事務局から，このようなときにはこういった協力をしますというように，適切な企業を紹介してもらう。それができれば，物理的な負担だったり調整する負担だったりはそんなにないと思います。ちょうど徳島大学さんも食品工業協会と協定を結んでおりまして，何か食品関係のことにはお互いやりましょうということで，協力させていただいています。

委員　例えば，阿南光高校さんと地元のＪＡ東とくしま，ＪＡアグリあなんが

農業振興もかねて，高校生とお互いの情報を伝え合う連携協定をまきました。いろいろな活動もスタートされているようです。個対個というのはなかなか効率がよくなかったり，守備範囲も非常に狭いので，大きな組織同士で包括的な協定がまけたら非常に理想的なのかなと思います。

委員　徳島商業さんも菓子工業組合と連携するなど，実態的にはそこそこありますが，あまりオーソライズされていないので，大きな声では言えません。そこにきちんと仕組みとしてつくれば，それは当たり前のものになるのかなと感じました。

委員　弊社でも大学とよく連携させていただいてまして，ＩＣＴやネットワーク，ＡＩ関係など，今はやりのことであれば我々は技術を持っていますので，どこのエリアにも職員を派遣しています。そういう教える行為そのものに対価は求めていなくて，これは今までの意見と一緒だと思います。我々は会社のプレゼンスがあがり，コミュニケーションの内容が伝わればいいです。卒業された方が我々を気に入っていただいて，就職など御縁があればいいと考えています。そういう中長期の観点から取り組んでいます。

対価や予算などにはそんなにこだわらなくていいと思います。どちらかというと，どういったことを具体的に学ばせたいからこういう人間を派遣してほしい，あるいは期間の融通が利くなど，そういうところをはっきりと，ある程度システマティックに，出す企業側と教えを聞きたい学校側のニーズがしっかりと合うような仕組みが，一番大事だと思っています。学校と企業の個別の協定では確かにうまく行かず，せっかく協定を結んでも形骸化してしまい，踏み込んで役割分担や，何をお互い期待しているのか，といったところまで話がしづらかったり，具体的な動きが何も出来ないというのが現状では多いです。そういうのを団体など大きなかたまりとして連携できれば，踏み込んだ仕掛けがつくれるのではないかと感じました。

委員　就職を決める際に私の子どもは非常に悩みました。企業の方と直接お話して，こういう会社なんだなと分かる機会というのがあまりありません。結局，先生や親に聞いて，この企業がいいのではということで，どうしてもネームバリューのあるところを選んで行こうとしてしまうのかなと感じました。いろいろな企業の方のお話を聞く機会が学校で何回かあれば，子どもたちもここへ行ってみたいなと選びやすいのではと思いました。

委員　建設業界というのは非常に若い方が入ってこない業界になってしまいました。なぜこういう状況になったのかという理由は，まず昔から３Ｋ，４Ｋといわれるように，きつい，汚い，休みも少ないということです。現在，働き方改革ということで国をあげてやっています。建設業界としましては，手をこまねいて待っていても仕方がないので，ものづくりの楽しさや，つくる生きがいを覚えてもらいたいということで，現場見学会などをやっています。なかなか新規就職者がいないため，今後業界全体の高齢化と人手不足が非常に危惧されますが，地道にそういう活動は続けていきたいと思っています。結局，高校，大学時代にテクニックを覚えても，特に工業関係では企業の方がはるかに進んでいます。やりがいだとか楽しさを教えてあげないことには，テクニックをいくら教えても新規就職者の増加には繋がらないと思います。

議題②　その他（次回の連絡）